

B 29の心象 続貂

—『大人になれなかった弟たちに…』との関連から—

近藤 明

An Image of B29 : A Supplementary Attempt

Akira KONDOH

一 はじめに

米倉斉加年『大人になれなかった弟たちに…』に、栄養失調で死んだ弟ヒロユキを背負った母と「僕」が疎開先の家に帰る際の状況を描いた、次のような場面がある。

空は高く高く青く澄んでいました。ブーンブーンというB 29の独特のエンジンの音がして、青空にきらつきらつと機体が美しく輝いています。道にも畑にも人影はありませんでした。歩いているのは三人だけです。

（光村図書出版『国語1』二〇一二年度版

p.106～107）

ここでB 29が「美しく」と形容されていることについて、山本一氏「B 29の心象—文学史研究者が見る『戦争教材』—」（『金沢大学語学・文学研究』三四 二〇〇六年）は、当時の日本国民の持つ「B 29」の心象として、おぞましさと美しさともいうべき両義的なものが、「個人によって異なるにちがいないが、また同世代の間で伝達可能な共通性をも持」っていたとの把握を示してい

る。筆者は山本氏と同様戦後（筆者は一九五八年）の生まれであるが、親や教師といった一世代上の大人は戦争を経験した世代であったこともあり、戦争経験者の話を直接聞くことのできる機会はまだまだ多く、また文学作品に限らず戦時中の回想録の類も目に触れやすかった世代である。その経験の範囲から言えば、山本氏のこの把握は違和感なく受け入れることができるものである。

この小文は、当時の日本人がB 29（一部米軍の他の機種も含む）に関して「美しい」あるいはそれに準じた語で形容している例を若干追加するという程度のものであり、山本氏の見解を何ら越えるものではない。ただ山本氏の

作品が成立した時代における語と心象との記号的関係は、すっかりは意識化されることなく作品の言葉の中に織り込まれてしまうのであり、作者にも同時代の読者にも自明なその関係は、時代の変遷によって決定的に損なわれ、その部分の叙述の意味関係は後世には「わからなくなる」のである。といった見解、あるいは

このような一見矛盾に満ちた心象のありかたこそ、すべての

体験のリアリティの核心である。たとえば「戦争を知らない」ということは、ただに「戦争の悲惨さを知らない」ことではない。むしろそれは、このような矛盾に満ちた心象の集積としての戦争体験を理解できないということなのである。といった見解に同意する立場から、この問題についての、年齢・立場とも多様な人々の例を加えることも、あながち無益ではないと考えてのことである。

二 民間人の立場からの小説・日記等

『大人になれなかった弟たちに…』の「僕」は、弟のヒロユキが生まれた時点で国民学校の四年生であり、言うまでもなく非戦闘員・民間人である。非戦闘員・民間人という点では「僕」と共通しながらも、年齢・立場等の異なる人々の例として、まず筆者の念頭に浮かんだのは、北杜夫（一九二七年生れ。当時旧制中学生）『榆家の人びと』における、B 29 についての次のような描写である。

① そうこうしているうちに、サイパンを基地とする B 29 が東京の空に侵入してきた。はじめは高高度からの偵察が目的で投弾はしなかったが、やがてきらきらと銀白色に輝くその機影が見事な梯団を組んで、高速にしかもゆうゆうと帝都の上空を回う日が多くなっていた。／本格的な冬に移ろうとしている季節であった。空は厭になるほど高所まで透きとおり、そこを迂回するように移動してゆく B 29 の機体はかなり大きく、とがった長い両翼、四つの発動機までがはっきりと見てとれた。翼のあとには薄い白い気体のようなものを吐きだしていたが、それはまもなく凝って鮮やかな飛行機雲となつてゆくものらしかった。／院代勝侯秀吉は、防空壕の入り口に立つ

て、半ばの好奇心、半ばの恐怖心を抱きながら、この敵機の編隊を見送っていた。（中略）「あれが B 29 か」／と、院代勝侯秀吉はおっかなびつくりの姿勢のまま呟いた。（中略）／めっきり皺の多くなつたそのもつたいぶつた顔には、かなりの昂奮、かなりの漠とした不安、そしてそれより多くの嘆賞のいろめいたものが確かに窺われた。

『榆家の人びと』第三部第五章

新潮文庫 p 一九四～一九五

高高度の偵察飛行が中心だった時期の B 29 の描写で、院代勝侯秀吉という初老の人物の立場から描かれているが、作者北杜夫の体験に基づく視点が投影していると見てよいであろう。「美しい」という言葉は使われていないものの、「嘆賞のいろめいたもの」というあたり、山本氏の引用する堀田善衛『方丈記私記』の「一種の、科学的感動」に近いものがある。

北杜夫とはほぼ同世代の宮脇俊三（一九二六年生れ。当時旧制高校生）にも

② B 29 の侵入が日常化するにつれ、恐怖心は薄らいでいった。澄んだ冬空に飛行機雲を引き、整然と通過して行く B 29 の編隊には美しささえあった。私たちは「畜生！ きれいだな」と言つて見とれた。『時刻表昭和史』角川文庫 p 一九三

③ 実際に空襲が始まってみると、B 29 は秋空冬空にキラキラと機体を輝かせながら飛行機雲を引いて軍需工場を目指し、そして私たち一般国民には目もくれず南方へ退去して行った。そこには餉度と美しささえあった。（同 p 二〇二）

といった記述があるが、これは三月十日の東京大空襲以前の、偵察と、飛行機工場等の軍事目標への爆撃が中心で、一般の民間人が攻撃対象でなかった時期であるためとも読むことができる。

しかし、民間人や住宅地に対する無差別爆撃を経験した後も、

B 29を美しく感じた者は居たようで、山田風太郎（一九二二年生れ。当時東京医専学生）の四月七日の日記では、既に三月の東京大空襲で学友に犠牲者も出ているのだが、

④外に出てみるに、西の方をこれら十機ないし二十機の編隊組みて北へ飛ぶ。或いは幻のごとく白きものあり、銀色燦然とかがやいて飛ぶ編隊あり。敵ながら実に堂々として壮麗無比の姿なり。B 29一機翼舞わして撃墜されたるを見き。

（山田風太郎『戦中派不戦日記』講談社文庫 p 二二四）と、やはり白昼のB 29（この日から護衛についてきたP 51戦闘機も含まれるか）を「壮麗無比」といった言葉で描写している（1）。

ここまでは、山本氏の言う「その飛行機から自分たちのところへ焼夷弾が落ちてくる可能性は低い」状況と言えるのだろうか、空襲の最中、観察者にとつて各段に危険性の高い状況においてさえ、B 29を美しいと感じている例もある。

⑤突然、すぐ真上で爆音がした。のしかかるように巨大なB 29の機体が、横手に立っている銀杏の樹の梢越しに、手をのばせばとどきそうな低空を通過していった。機体の下の爆弾倉が開いているのまではつきりと見てとれた。それは流線形の、金属の工芸品の極致とも見える物体であった。現実のものとも思えず、さながら神話の怪鳥の化身のように見えた。翼と胴がにぶく光を反射し、ぞつとするようなおぞましい妖しい美しさであった。周二が身の危険も忘れ、茫然と見惚れて立ちすくんでいたほどに。／我に帰って周二は意味もなく呟いた。／「敵もなかなかやるな」

『楡家の人びと』第三部 第八章 p 一九一～一九二
五月二五日の東京大空襲の夜、低空飛行するB 29を、楡家の次男周二の視点から描いた場面である。周二は年齢・家族構成上の位置とも北杜夫本人に近く、北杜夫の体験の投影という面が特に

強い場面であろう（2）。

北杜夫は当時十代後半という年齢であったが、三十歳以上上の江戸川乱歩（一八九四年生れ）の小説「防空壕」でも、市川清一という人物の口を通して空襲中のB 29の姿が次のように語られている（3）。

⑥火災による暴風と、竜巻きと、黒けむりの中を、超低空に乱舞する赤面巨大機は、この世の終りの恐ろしさでもあったが、一方では言語に絶する美観でもあった。凄絶だった。荘厳でさえあった。

『江戸川乱歩全集 第19巻』光文社文庫 p 二〇
このように語る市川清一は、この後の話の展開上、いささか背徳的な価値観・美意識の持ち主のように描かれているようで、B 29を美しいと感じることも、そちらの面との繋がりがやや誇張されているかとも感じられる。しかし、そのような面はあるとしても、⑤の描写と符合するところの多さに、筆者としてはむしろ目を引かれる。

更に野坂昭如（一九三〇年生れ）『火垂るの墓』にも、同様の状況で、「美しい」というのではないが

⑦夜空見上げると、炎上の煙かすめてB 二九が山へとび海へむかいもはや恐怖はなく、ワイイと手でも振りたいたい気持さえある。『アメリカひじき・火垂るの墓』新潮文庫 p 八二

といった描写があり、そういう状況でも恐怖や憎悪一辺倒ではない感情を抱くことは必ずしも特殊ではなかったことが伺われる（4）。

このような夜間空襲下、観察者自身相当な危険にさらされた状態の例については、その機影が「直接の恐怖をもたらさない」「その飛行機から自分たちのところへ焼夷弾が落ちてくる可能性は低い」といったことだけでは説明しきれそうにない。「一見矛盾に満ちた心象のありかた」という山本氏の言葉が改めて想起される。

ただ敢えてこれらに共通する点を見いだそうとすれば、幾つかの点が挙げられはしないかと思う。

ここで、小型で小回りの利く艦載機等による空襲と比べてみよう。前掲の『時刻表昭和史』ではB29の場合あらかじめ警戒警報・空襲警報があり、現れて二時間もすれば南方洋上に退去するという型が固定していたのに対し、「艦載機の場合は勝手がちがった」とし、

小編隊に分散して、ばらばらに各地を襲う。機体は小さくスピードは早いから爆音が聞こえても姿の见えないことが多い。しかも空母からつぎつぎに飛び立つて波状攻撃を加えてくる。急降下したり急上昇したりするから爆音もB29のように単調ではなく、大きくなったり小さくなったりする。神出鬼没で正体がかめず、薄気味が悪い。(中略) 艦載機による攻撃は爆撃機と違って怖いという話は聞いていた。三年前の一七年四月一八日の奇襲攻撃のときは、校庭で遊んでいた小学生を機銃掃射したというし、畔道を歩いていた農夫や走行中の列車が銃弾を浴びたとも伝えられていた(5)。

(p一九四～一九五)
と述べている。「すでに硫黄島を基地とする戦闘機P51が空襲に参加し、交通機関から通行人にまで銃撃をあびせかけてきた。」『樫家の人びと』第三部 第八章 p四〇〇) というP51戦闘機も、「空母からつぎつぎに」の部分以外は同様だっただろう。例えば同じく定番教材である山川方夫(一九三〇年生れ)「夏の葬列」で、国民学校五年生の「ヒロ子さん」と二年下の「彼」が艦載機の機銃掃射を受ける場面は、次のようである。

⑧叫びごえがあがった。「カンサイキだあ」と、その声はどなった。／艦載機だ。彼は恐怖に喉がつまり、とたんに芋畑の中

に倒れこんだ。炸裂音が空中にすさまじい響きを立てて頭上を過ぎ、女の泣きわめく声がきこえた。

『夏の葬列』集英社文庫 p九

ここから伝わる恐ろしさは、まさに『時刻表昭和史』に述べられているような質のものであるし、「火垂るの墓」にも、

⑨八月に入ると、連日艦載機が来襲し(中略)夏空にキラキラと光り彼方とみるうち、不意に殺到する機銃掃射の恐怖に、家人すべて壕へ首をすくめるそのすきをねらい (p八二) という記述がある。

このような艦載機・小型機による空襲では、一人二人といった小人数の民間人でも攻撃目標になり、しかも攻撃の予測が困難で不意打ち的であり、従って機影を認めてから自らに危害が及ぶまでの時間差もほとんどない。このような空襲で敵機を「美しい」と形容した例はなかなか目に入らない(6)。

一方B29の場合、行動の型が固定的であったことは前述の通りであり、小回りの利かないこともあって、艦載機のような不意打ち性は少ない。また昼間高度飛行中の同機は無論、低空から夜間空襲中の同機にしても、一人二人といった小人数を狙っての攻撃はまずして来ず、従って自分の居る町が攻撃されてはいても、自分個人を狙って攻撃されているという感覚はあまりないのではあるまいか(7)。

三 教材としての当該箇所の扱い

この作品を教材として扱う場合、「敵機B29が『美しい』と描かれていることに疑問をもつ生徒に対して、満足のいく解答がでないでいた」(石川県教育センター『金沢大学連携研修の成果紀要第五号』二〇一〇年 p三八)といった戸惑いを覚える向き

もあるようである。

この作品が掲載されている光村図書出版の中学校教科書『国語1』（二〇二二年版）の指導書では、該当箇所について

疎開の原因にもなったB 29の機体を、ここでは「美しく輝いて」と表現している。爆撃のための飛行機という意味を離れて、機体の無機的な美しさが印象に残っていることから、そのときの「僕」の空虚な心情がより鮮明に描かれている。

としている。第二節で挙げた例からは、特に「空虚な心情」を抱いていなくとも「美しく」感じることはあるのではと思われるもの、比較的無難な解釈とも言える。一方この「美しく」に特別な意味を見出し、それを強調した授業展開をしようとする試みもあるようである。

B 29で多くの町や村が焼かれ、食べ物もなくなり、多くの幼い命が奪われていったことだろう。B 29が、弟ヒロユキを殺したのである。B 29は、〈僕〉やヒロユキにひもじさをもたらし、母を苦しめ、ヒロユキの命をうばう悲惨な戦争の象徴なのである。〈美しい〉どころか、もつとも醜い、憎むべきものなのである。しかし、そのことに〈僕〉は全く気づいていない。／だから、いっそう読者としては、痛ましくもなる。弟の命を奪ったのはこれなんだよと、教えてやりたいくらいである。／本質が見えない人間には、醜いものが美しく見えてしまうのである。本当に憎むべき相手が見えないのである。

（西郷竹彦監修 土居幸代著

『文芸研・教材研究ハンドブック 中学校1

米倉斉加年Ⅱ大人になれなかった弟たちに…』

明治図書出版一九九三年 P 一六〇一七

弟は栄養失調で死んだのであるが、元をたどれば、B 29に象徴される戦争の犠牲者なのである。そのことにさえ気づかぬ

ほど幼い〈僕〉は、B 29を〈美しい〉と見ている。／弟の命を奪ったものだとも気づかず、B 29を〈美しい〉と見てしまう〈僕〉に、読者ははがゆい思いと痛ましい思いを同時に感じる。〈僕〉がB 29を〈美しい〉と見れば見るほど、状況が見えない〈僕〉への腹立たしさと、そんな幼な子までも巻きこむのが戦争なのかと、痛ましさ、怒りがこみあげてくる。

（同書P二三）

「そうね。こんなに何にもわからない子どもまで巻きこむのが戦争なんですね。B 29が美しいと〈僕〉が思えば思うほど、読者としては、切ない気持ちになってくるね、読者としては、どうしても気がつかないのかと言つてやりたいくらい〈僕〉が気の毒でかわいそうでたまらない。こういう複雑な感想をもつね。これを作品の味わい、美というんではないね。ノートをまとめて終わりました」

（同書P五二）

このような理解・指導は、B 29が恐るべき被害をもたらした、あるいはこれからもうとらさずであろうと認識できる理性のある者ならば、その姿を「美しい」と感じる筈はないとの前提に基づくものと言えよう。

山本氏の論や、第二節で挙げた例で知られる通り、「僕」より年上で、B 29の脅威を十分認識できる、あるいは既に痛切に体験している日本側の人物が、おそらく矛盾を自覚しつつも、B 29を「美しい」と感じているのである。B 29を「美しい」と感じたからといって、その人物が当時においてもひどく特殊といえる心理状態にあったとか、「状況が見えない」幼少者や理性・分別の無い人物だということにはならない。醜い用途を持つ殺人兵器は醜くしか見えない筈という観念が先行するあまり、「矛盾に満ちた心証の集積としての戦争体験を理解できない」（山本氏）という弊に陥ってはいまいかとの懸念すら、頭をよぎるところである。

むろん、B29を「美しい」と形容した例をいくつ挙げたところで、当該箇所の「美しく」が、当時の日本人にある程度普遍的であった心象として理解し得る可能性を示すことにはなっても、「僕」の幼さや、「僕」のこの時の個別的・特異的な心情によるとする読解の可能性を、百パーセント否定することはできない（それにしても前者の読解では、「僕」が年齢に比してあまりに幼すぎる気もするのだが）。まして、拙文は系統だった調査の結果でもない。

しかし、そのような理解に基づく読解、さらにそれに基づく指導を行うことには、よほどの慎重さを要するということまでは言えるのではあるまいか。

付 軍人の立場からの手記等

第二節では、本稿の趣旨上、主に非戦闘員・民間人の立場からの観察・記述を見たが、軍人の立場にはある者はどうだったのか。そのような立場の人物の手記・回顧録は無数にあり、ごく一部の手元にある物、たまたま目についた物に限ったことなのであるが、陸・海・空それぞれの軍人の手記類にも、B29（一部他機種も含む）を「美しい」あるいはそれに類する語句で形容している例が見られることを、備忘的に記しておく。

まず戦闘機パイロットとしてB29と戦った経験を豊富に持つ人物の手記である。

⑩八月五日、十三時三十三分、西部軍管区に警戒警報が発令された。／情報は、敵の大型機一機、佐賀県唐津上空、高度八千メートル、偵察機らしきもの東進中、というものであった。

（中略）／この日は、巻雲わずかにたなびく日本晴れともいふべき快晴で、一万メートルの高空を行くB29が、白い飛行

雲を曳いている姿が美しく見え、それだけ敵愾心をあおられたのか、飛行師団司令部の命令も、徹底的攻撃を敢行せよとの強い調子の指令となり、戦隊長は出動を命じたのであった。

（樫出勇『B29撃墜記』光人社NF文庫 p.五七）

この戦隊長の命令をうけて筆者の樫出氏も出撃するのが（8）、樫出氏は大正四（一九一五）年生れでノモンハン事件の空中戦経験もあるパイロットであり、この二か月ほど前の昭和十九年六月十六日、北九州地区への初空襲の際、既に交戦して撃墜も記録しており、その時のことを「そのとき私はどれ程の恐怖感を抱いていたか（9）」とも回想している（同書 p.一四）。

B29に対する敵愾心や恐怖心は、第二節で見たB29を「美しい」と感じた民間人にも存在したものであるが、樫出氏の場合、戦闘機で空に上がって戦いを交えた経験を持つだけに、その敵愾心にせよ恐怖心にせよ、切実・具体的なものであったであろう。

その樫出氏がB29をこのように形容していることに注目したい。ただ、樫出氏が「美しい」と形容しているのは、高空を飛んでいるB29を地上から眺めている状況においてであって、①②④あたりの状況と通じる。戦闘機を操縦してB29に接近し砲火を交える場面ではこのような形容は出てこないのである。

次は、B29以外の機種に対してではあるが、軍艦で対空戦闘にあたる人物が「美しい」と感じる例である。

⑪午後になって当直にたっていた川久保一水が、四群機銃指揮所から「班長、変な飛行機ですね」と声をかける。その指さす方を仰ぐと、あかるい南国の空の雲のきれめから、透き通るように美しい銀色の翼を輝かせて現れた四発機、紛う方なきB24である。／「馬鹿、早く防空指揮所へ報告しろ」（中略）「いよいよこゝまで来たか……」艦長の沈んだ声であった。

（佐藤太郎『戦艦武蔵の死闘』鱗書房 p.四八）

⑫「B二四、三機右九十度、高角三度五〇〇」／見張所は、一瞬にして騒然となった。(中略)「いた、いた」／紺碧の空に点々と湧いた黒煙、その弾幕の上にB二四、悠々と飛んでくる。南方の朝の陽光を、その銀色の翼にキラキラと光らせて直進している。光にてりはえた銀色のジュラルミンが、蒼空を背景にして何ともいえぬ美しさである。もはや肉眼でもよくみえる。ブルネー出撃以来、始めて見参した敵機である。

(同 p 二二)

佐藤氏は、戦艦武蔵の「四群機銃長」だった人物で、引用書の著者略歴によると大正四(一九一五)年生れ、砲術学校普通科及び高等科の対空班教程を卒業し、開戦時は駆逐艦朝雲の機銃長ということであるから、対空戦闘の知識・経験が深く(高空の大型機を射撃するのは機銃の任務ではなかったにせよ)、機種の識別にも信頼がおけるであろう。

B 24は⑪⑫いずれの場合も偵察・索敵が任務で、直接投弾したわけではないが、⑪はこの四日後にトラック島の基地に空襲があり、それによって同基地は潰滅的打撃を受けることになるし(ただし武蔵は既に横須賀に向けて出港して不在)、⑫はレイテ沖海戦の時のことで、「こんな案内役がいたのでは、敵機の来襲は必至である」(p 二四)とあるように、このB 24の接触が始まってから二時間後に艦載機による空襲が始まり、それによって武蔵は撃沈されている。その艦載機による空襲の場面では、佐藤氏は「横腹を白く光らせながら」(p 二六)と描写するものの、「美しい」といった形容はしていない。

B 24が直接自らに向けて投弾しなくとも、基地や艦隊に対する空襲の前触れであることは、その任務や経験上、佐藤氏は熟知していたであろう。無知・無分別ゆえにB 24を「美しい」と感じたわけではない。偵察・索敵が任務と判断される機の場合、それが

自らやその周辺に恐ろしい結果をもたらすことが分かっている程度(数日から二・三時間程度?)の時間差がある。その時間差が、「美しい」と感じ得るか否かに関係していると考えられまいか。

次は小説の中のことであるが、B 29が自分たちを狙って襲ってくる危険を悟りつつも「ひどく美し」と感じている場面である。

⑬また、私たち一号生徒だけが帆走でひるま中村まで出かけたことがあった。私たちのカッターは中村の先端に突き出している鼻とその沖に碇泊している利根とのあいだを縫うようにして進んでいった。するとそのときとつぜん、B 29が四十機ほど能美島の四郎五郎山の上を通ってすがたをみせた。その機体が日のひかりをあびてきらきら照りはえるさまは、ひどく美しく感動的でした。／私たちはおもわずからだを伏せた。／「權用意!」と伍長がさけんだ。私たちは帆をおろし、マストを倒すと急いで十二本のオールをとった。そのまにもB 29はかなりひくめの高度で頭上を圧するように近づいてくる。／「用意、前へ!」／私たちは一せいにこぎはじめた。オールの水面をたたく音が妙に拡大されて私の耳をうってくるようだった。／編隊はほとんど真上に迫ってきていた。もし相手がその気になれば、私たちはひとたまりもなく爆砕されてしまうだろう。

(菊村到「あゝ江田島」 新潮文庫『硫黄島・あゝ江田島』

p 九二―九三)

この後、利根(巡洋艦)の対空砲火で海軍兵学校生徒である「私」たちのカッターは救われるのだが、B 29の機影を認めると「からだを伏せ」、帆走から撓走に移行して、「爆砕され」る危険を感じながら島影に退避しようとしている。

ただし、著者の菊村到は仙台陸軍予備士官学校を昭和二十年に

卒業し、秋田の歩兵部隊に赴任したということから、B29を地上から見上げたり空襲を受けたたりした経験はあったとしても、海軍軍人として自らこのような場面を体験したわけではないであろうし、兵学校のカッターという手漕ぎの短艇を狙ってB29が「かなりひくめの高度」まで降りて攻撃をかけてくるものか、筆者の知識では判定できない。もし実際にそういうことがあったとしたら、一人二人といった小人数を狙ってくる状況に近い恐怖感がありそうであるが、自らに危害が及ぶまで(⑪⑫と比べれば少ないながらも)まだしも若干の時間差があるところが、艦載機の場合等とは異なるのかも知れない。

さらに地上部隊の兵士の例として、米国陸軍省編『日米最後の戦闘』での昭和二十年一月二十二日の沖縄空襲についての記述に次のようなものがある。

⑬ 日本の一步兵上等兵は、一月二十二日の日記に怒りをぶちまけて次のように書いている。／「グラマン、ボーイング、ノースアメリカンと一機一機つぎつぎに飛来す。ああ何たることぞ！敵機頭上を旋回して銃撃を加うと思えば、超大型機飛行場上空に現われ爆弾を投下す。爆撃残忍をきわむ。無念なり。すでに十五時を過ぎるも空爆未だやまず、十八時、最後の二機至近弾を投下せり。然りと雖も、今朝敵機飛行雲を引ききて飛来せる時は実に美なりと認めざるを得ず。」

(外間正四郎訳 光人社NF文庫 p五五)

沖縄守備隊の陸軍兵士の日記が何らかの経緯で米軍の手に落ち、それを一度英文に翻訳したものによっているのであろうから、「美なり」の部分の原文の表現がどういうものであったか分からないのだが、それに類する表現であったとは考えてよいだろう。終日「残忍をきわめた爆撃を受けた(この兵士は壕が何かに退避して難を逃れていたとしても)兵士が、「今朝」の敵機飛来時のこと

を回想して「美なり」と形容しているのである。

ただこの記述からは、「美なり」と感じたのは「超大型機」のことなのか、艦載機やP51戦闘機のような小型機のことなのか、その両者の混成による編隊のことなのかは判然としないし、「グラマン、ボーイング、ノースアメリカン」といった記述からも機種名が十分特定できないところが残るのであるが(10)。

以上、まとまりのない記述になったが、敵機を「美しい」と感じることは軍人にもあり、それは敵愾心や・怒り・恐怖心と同居し得るものであったこと、その感覚は主にB29やB24といった大型機に対するものであり、艦載機のような小型機を含めてその形容した可能性があるのは⑬の例だけである、といった程度のことと言えるかと思う。

注

(1) 同じ山田風太郎の日記には、

午前休講。校庭の防空壕の上に寝そべって、友人たちと笑いと駄ジャレの交換。青い空に白雲動く。理屈ぬきの溢れるような明るい喜び。／正午B29相次いで二機至る。頭上を白き雲ひきて通りすぎゆく敵機を仰向けになったまま眺めてみな笑っている。(四月二八日 p一四九)

と、「美しい」といった形容をしているのではないが、呑気な様子でB29を見上げる記述もある。

(2) 北杜夫は後年、空襲の記憶を「とにかくアメリカが憎かったんです。でもB29がのし掛かるように飛んできて、灯に照らされて、あやしい美しさなんです。敵もやるな、と思った。」(『朝日新聞』二〇一〇年十一月十一日)と語っている。

(3) この作品では白昼のB29についても僕はむろん戦争を呪っていた。しかし、戦争の驚異とでもいうようなものに、なにかしら惹きつけられていなかったとは云

えない。(中略)最も僕をワクワクさせたのは、新しい武器の驚異だった。敵の武器だから、いまいましくはあったけれど、やはり驚異に相違なかった。B 29というあの巨大な戦闘機がそれを代表していた。そのころはまだ原爆というものを知らなかった。(中略)B 29が飛行雲を湧かしながら、真つ青に晴れわたった遙かの空を、まるで澄んだ池の目の高のように、可愛らしく飛んでいく姿は、敵ながら美しかった。(p 132)と描写されている。なお光文社文庫の「註釈」にもあるように、B 29は「戦闘機」ではなく「爆撃機」であろうが、この場合の「戦闘機」とは「輸送機や練習機以外の」戦闘目的の軍用機」という程度の意味か。

(4) 『榎家の人びと』で、昭和十八(一九四三)年、軍医中尉である城木達紀(榎家の長男峻一の友人で藍子の恋人)が、ラバウル基地への空襲を記録した日記の文面に

朝三時頃空襲、イツモヨリ低ク、探照燈ニ輝ク機影キラキラト美シイ。高角砲ノ当ラザルコト例ノゴトシ。

(第三部 第三章 下二六〇)

とあるのも、空襲下という点では共通するが、④⑤のような大火災は起きていない。また、応招の軍医とはいえ軍人の立場からであるから、本節で見る民間人の立場からの記述とはやや異質かも知れない。なおこの場合の機種は、B 29の一世代前の四発重爆撃機であるB 17である。

(5) 「昭和」一七年四月一八日の奇襲攻撃」は、いわゆるドウィットル(J. Doolittle)隊による初空襲のことであろうが、この時空母から飛来したB 25爆撃機は、細かく言えば陸軍の双発中型機であつて、空母からの発艦は臨時的運用であり、艦上機としての運用を前提として設計された機体ではなさそうである。その点通常「艦載機」と言われるものとは異なるが、B 29よりはるかに小型で小回りが利きそうな機体であるから、空襲の様相はここに描かれたようなものであつたのだろう。

(6) ④の例がP 51戦闘機を含んだ編隊だとすれば例外ということに

なるが、高度や編隊の組み方等から、爆撃目標へ向けて飛行中のB 29の護衛に専念していると判断される状況であつたとかいふた事情もあろうか。

なお向田邦子の随筆「こはん」には、「空襲も昼間の場合は艦載機が一機か二機で偵察だけと判つていたから、のんびりしたものだ」『父の詫び状』文春文庫 p 八四)と、艦載機の侵入に対し、「美しい」というのではないが、「のんびりした」気分に対応したことが述べられているが、①のようなB 29による偵察飛行との記憶の混同がないかどうか。

(7) ただし注(3)で引用した江戸川乱歩の文章でも触れられているが、原爆攻撃では事情が異なりそうである。白昼、少数のB 29であつても、また特に観察者に狙いを付けた攻撃でなくとも、上空で一発爆発すれば致命的であるし、機影を認めてから被害がおよぶまでの時間差についても、従来の経験則は通用しなくなつたであろう。

(8) このB 29は、中国大陸から唐津上空を経て、八幡上空で樫出機と交戦しているが、樫出氏は山口県小月の基地から出撃しているのだから、このB 29を地上で見たわけではないだろう(それでは追いつけない)。しかし地上でB 29を眺めて美しいと感じた経験が樫出氏にあつたと見ることを、妨げはしないだろう。

(9) この「恐怖感」は、初めて見るB 29の機体の大きさによる威圧感や、両機が衝突の危険があるほど接近していたこと等もありそうだが、B 29の強力な防御砲火が大きな要因のようである。樫出氏の搭乗していた戦闘機「屠龍」(「キ45改」「二式複座戦闘機」とも称された)は、燃料タンクの防弾装備が貧弱で「敵機の十三ミリ弾が、このタンクの部分に命中すれば、ひとたまりもなく火を噴いた」(前掲書p 112)とのことで、地上で爆撃を受ける者とは別種の、切実な恐怖感があつたのである。

(10) 「ボーイング」はB 29のメーカーであるが、B 17のメーカーでもあるし、四発大型爆撃機を漠然とこう称したことも考えられる(B 24は「ボーイング」ではなく「コンソリデーター」だ)が。なお沖縄守備隊の陸軍兵士の証言として、米軍艦艇に関する次の

ようなものも注目に値しそうである(著者の古川氏は一九一六年生れで、当時独立高射砲第八一大隊所屬)。

双眼鏡を用いるまでもなく、つぎつぎに視野に入りきたる真白の大戦艦、そのいずれもが、閃々と砲火を吐きながら、緩速度で北方に移動を続ける。／発射の閃光を見てから、その轟音が耳にとどくまでちょうど三〇秒あった。直距離一万メートルである。／真白の浮城の列は、まるで幻のようにゆうゆうとしていた。(中略) それに閃々と火ぶたをきる姿を眼前にしながら、／「これがおれたちを殺しにきた船だ」／とすぐには納得のできぬ、なにかあやしいばかりの美しさを、この白い戦艦群は持っていた。

(古川成美『沖繩の最後』新装版 河出書房新社

p七三〜七四)